

おやつに薬用は大活躍

痙攣や腹痛に
効果

健康食などにもよく使われる米飴。漢方の生薬としても活躍する。

「立てば芍薬」という言葉は、日本の代表的美人を総称している。顔が美しく好ましい意味で、もともとは倬約（しゃくやく）と書いたという。学名もギリシャ神話の「医神」に由来するとあり、この属の植物の根は古くから薬用にされていたことがうかがえる。

漢方入門のころ。四十代の男性が来て「腹部の手術後、尿が気持ちよく出ない。血尿があり、疲れやすい」という。やせ形で顔色が茶褐色。「猪苓湯（ちよれいとう）」でいけると思い、自信を持って十日分お渡しした。

ところが病状に全く変化がない。男性は口の渇きが少々あり、時々腹痛もあるという。「小建中湯証（しょうけんちゅうとうじょう）

うとうしよう）」のようだ。これに処方すると、しばらくして尿の中に糸くずがどろどろした粘液とともに出てきた。そして「血塊」が痛みとともに排せつされ完治した。

最近の例では、知り合いのご婦人。「トイレを貸して」「どうしたの」「尿が三十分おきに出るの。治療をいろいろ受けているの」「小建中湯を飲んでごらんよ」。一週間ほど差し上げたが、三日目にほぼ治まった。

もう一つ挙げよう。父親が心配して連れてきた小六の男の子。「毎晩腹痛がして、最近は何かが写った」という。開腹手術を勧められたらしい。

話から私立中学の受験に伴うストレスや疲れが考えられたため、「小建中湯」にした。すると、その夜から「腹中急痛（ふくちゅうきゅうつう）」という差し込むような痛みが和らぎ、程なくして消えた。

小建中湯の主薬は「芍薬」「甘

草（かんぞう）」「米飴（べいい）」の三味。それに気剤の「桂枝」、消化器を温める「生姜（しょうが）」「大棗（たいそう）」の三味を加えた六味のハーモニー。キーワードは「虚弱で疲れやすい」「腹が急に痛む」「動悸（どうき）」「鼻血が出たり手足がほてる」「のどが渇く」「尿の回数が増える」「腹直筋が筋張る」――など。これらが二つ、三つそろえば扉が開く。

現代薬理の考え方では、芍薬と甘草でよさそうなのに（本欄五月一日付小川幸男先生の稿、米飴がないとうまくいかない。解説書（古方書）によれば、膠飴、急を緩め力を与え、故によく裏急（りききゅう）筋脈のけいれん）を治し、腹痛を和ます、とある。澱粉（でんぷん）製、酸化糖化物を最低とし、もち米を麦芽で糖化したものが最高品。